

新刊紹介

瀧田寧・西島佑編著『機械翻訳と未来社会—  
言語の壁はなくなるのか』(2019)  
社会評論社、240頁

西 島 佑

はじめに

近年、人工知能 (artificial intelligence, AI) を社会に導入しようとする動きが活発になっている。言語に関する分野では、AIによる自動翻訳システムがそれに該当するだろう。AIのような知的機構による自動翻訳は、「機械翻訳」(machine translation)とよばれている<sup>1)</sup>。たとえば、Google翻訳がそうである。近年の機械翻訳の技術的進歩はめまぐるしく、その精度がどこまで上がるのかも未知数である。本稿で紹介する瀧田寧・西島佑編著『機械翻訳と未来社会—言語の壁はなくなるのか』社会評論社、2019年(以下「本書」)は、この機械翻訳と社会の関係をテーマにしている。

機械翻訳と言語政策にいかなる関係があるのだろうか。最近の日本言語政策学会の大会では、機械翻訳に関連した報告が散見される<sup>2)</sup>。こうした報告において「機械翻訳」は、「多文化共生」時代における地方自治体の多言語対応の一端として位置づけられている。たしかに、機械翻訳は、ある程度には実用的になってきており、このまま精度が上がっていくのであれば、多言語対応の手段の1つとして無視できないものとなっていくだろう。

しかし、ここで1つ疑問が浮かぶ。機械翻訳が多文化共生や言語サービスの一端を担えるのだとしても、それはどの程度までであるのだろうか。どこまで機械翻訳に上記のような営みを任せられるのか、あるいは任してもよいといえるのだろうか。

本書は、こうした疑問を考えるためのとっかかりといえる。近年、技術者による機械翻訳に関する書籍は増加しているが、本書は人文・社会科学の立場から機械翻訳と(未来)社会の関係を考察しようとするところに特徴がある。本稿では、本書の内容について紹介することとしたい。

## 本書の概要

本書の主要なコンテンツは、第一章から三章までの論文となっている。論文執筆者とその専門は、羽成拓史（社会言語学、第一章）、瀬上和典（文学、第二章）、西島佑（政治哲学、第三章）である。これら3本の論文に対して、さらに3人のコメンテーターによる批判的コメントがつけられている。第一章には生田小子が、第二章には鈴木章能が、第三章には塚原信行がコメントしている。その上で、これらのコメントに対して論文執筆者が応答する形式となっている。この形式がとられた理由は、「機械翻訳」という未来の技術については現在のところ予測しか提示できないことにある。そこで執筆者とコメンテーターのやりとりを見せることで、多角的な視点となるように工夫されている。本書全体の目次は次のとおりである。

- 巻頭言 「機械翻訳はバベルの塔を再建するか」 木村護郎クリストフ
- 座談一 「本書への誘い」 瀧田寧、西島佑、羽成拓史、瀬上和典
- コラム 「機械翻訳はここまで可能になった」 隅田英一郎
- 序章 「機械翻訳をめぐる議論の歴史」 西島佑
- 第一章 「機械翻訳とポライトネス — 機械翻訳に反映させるべきポライトネスとその手法に関する一考察」 羽成拓史
  - ◇ 「羽成論文へのコメント」 生田小子
  - ◇ 「生田コメントへの応答 ポライトネスを機械翻訳に反映させるということ — 付加的要素を含めた方法論の再検討 —」 羽成拓史
- 第二章 「機械翻訳の限界と人間による翻訳の可能性」 瀬上和典
  - ◇ 「瀬上論文へのコメント」 鈴木章能
  - ◇ 「鈴木コメントへの応答 機械翻訳の問題点の具体例と機械翻訳を用いることの倫理」 瀬上和典
- 第三章 「機械翻訳は言語帝国主義を終わらせるのか? — そのしくみから考えてみる」 西島佑
  - ◇ 「西島論文へのコメント」 塚原信行
  - ◇ 「塚原コメントへの応答 機械翻訳と権力の諸問題についての試論」 西島佑
- 座談二 「機械翻訳が普及した未来社会」 瀧田寧、西島佑、羽成拓史、瀬上和典
- エピローグ 「コミュニケーションの入口としての機械翻訳」 瀧田寧

巻頭言「機械翻訳はバベルの塔を再建するか」は木村護郎クリストフによっている。比較的好く知られているバベルの塔の話とは、人間が神へ近づくために塔を建築したが、怒れる神によって塔は壊され、言語をバラバラにすることで二度と塔を建てることはできないようにした、というものとなるだろう。高度な機械翻訳によってバラバラにされた言語が翻訳を通して統合できるのであれば、バベルの塔を再建することも可能かもしれない。しかし、木村によれば、バベルの塔の逸話には別の解釈がありうるという。その解釈とは、神は、「罰」として言語をバラバラにしたのではなく、むしろ多言語状態を擁護したというものである。このような解釈からすると、機械翻訳とバベルの塔との安易な関連付けは、多言語状態を擁護する神の意をかえりみないものといえるのかもしれない。

座談一「本書への誘い」では、本書が成立するまでの経緯と、各章の要点が座談形式で論じられている。また本書の主要コンテンツは若手研究者によっているので、研究者らの背景も紹介されている。

機械翻訳の開発に携わる隅田英一郎のコラム「機械翻訳はここまで可能になった」では、機械翻訳の歴史とその精度の向上が簡潔にまとめられている。「機械翻訳は文脈を理解できない」と批判する声も多いが、隅田は、むしろそうした要求まで出てくるほどに機械翻訳は高度化したと述べている。

序章の西島佑「機械翻訳をめぐる議論の歴史」では、隅田コラムとは異なる視点から機械翻訳の歴史が論じられている。ここでは、機械翻訳における技術発展の歴史だけではなく、20世紀後半に行われたヒューバート・ドレイファスやジョン・サールなど人文・社会科学系からの議論も並行してとりあげられている。後半では、今後、機械翻訳の役割をどこまで認められるのかについての議論が展開されている。

第一章の羽成拓史「機械翻訳とポライトネス -機械翻訳に反映させるべきポライトネスとその手法に関する一考察」では、機械翻訳が社会に浸透するためには、ポライトネスの反映が必要と論じられている。ほかの論文と比べて、羽成論文は、人文・社会科学系の立場から機械翻訳をより発展させる方策を指摘しているところに特徴がある。この羽成論文に対して、生田小子による「羽成論文へのコメント」では、より具体的な事例を求めたり、音声翻訳やポライトネス研究におけるインポライトネス分野の成果も考慮するように提案している。「生田コメントへの応答」で羽成は、生田にこたえつつ、「ポライトネス研究から機械翻訳技術の発展を見守りたい」と結んでいる。

第二章の瀬上和典「機械翻訳の限界と人間による翻訳の可能性」では、機械翻訳が高度化するなかで、あらためて人間による翻訳の独自性とはなにかを問うている。瀬上は、

主にトランスレーションスタディーズからこの問いを論じ、「創造翻訳」という機械翻訳のしくみでは不可能な翻訳の可能性を指摘する。その上で人間と機械翻訳は対立するものではなく、むしろ協働する時代になるのではないかと述べている。鈴木章能による「瀬上論文へのコメント」では、エマニュエル・レヴィナスの倫理学などから、翻訳における異文化理解・他者理解・倫理の問題が「人間と機械翻訳の協働」によって理論的、現実的にどのように変化するのが問われている。瀬上の「鈴木コメントへの応答」では、機械翻訳による他者性の捨象を指摘しつつも、機械翻訳の浸透は避けられないとし、文系／理系を乗り越えてこの問題を考察することの意義を説いている。

第三章の西島佑「機械翻訳は言語帝国主義を終わらせるのか？—そのしくみから考えてみる」では、未来において高度な機械翻訳が登場すると仮定した上で、機械翻訳によって英語の一極状態が終わるのかを問うている。その上で、現代の機械翻訳のしくみでは、英語の一極状態が表層的に終わったようにみえとしても、水面下ではその影響は残りつづけると論じられている。塚原信行の「西島論文へのコメント」では、西島論文でとりあげられている「言語帝国主義」という語の定義に疑義が呈されており、糟谷啓介の定義を引用しつつ、あらためて「機械翻訳は言語帝国主義を終わらせるのか」を問うている。「応答」で西島は、言語帝国主義の議論は、もともとグラムシの「ヘゲモニー」が念頭にあったのに対して、機械翻訳における言語帝国主義では、グラムシよりもフーコーの権力論に近くなる、とこたえている。

座談二「機械翻訳が普及した未来社会」では、論文執筆者たちによって機械翻訳と社会の今後が語られている。西島、羽成、瀬上で論調が異なることも多いが、三者とも人文・社会科学の分野においても機械翻訳を研究テーマとすべきという点では共通している。

エピローグの瀧田寧「コミュニケーションの入口としての機械翻訳」では、機械と人間の違い、外国旅行、翻訳の限界をルネ・デカルト、ミシェル・モンテーニュ、ジョン・ロックの思想を通して論じられている。それを踏まえて瀧田は、機械翻訳によって異文化的なコミュニケーションが完結すると考えるのではなく、機械翻訳は「ほんの入り口」とであると結んでいる。

## おわりに

多言語主義的な言語政策に機械翻訳がつかわれている例は、他国でもみうけられる。たとえば EU では、公文書が多言語翻訳されていることがよく知られているが、その作

業に機械翻訳はもはや不可欠になっているという（長尾 2016. 1）。こうした例からも、多言語政策を考えていくために機械翻訳は無視できないものとなりつつある、と述べる事が許されるだろう。

だが AI による自動翻訳に、どこまで翻訳／通訳を任すことができるのだろうか。どのような利点があり、どのような問題が生じるのだろうか。本書は、このような点を考察しはじめるためのとっかかりの1つとなることを目指して編まれている。

## 注

- 1) 「自動翻訳」(automatic translation)と「機械翻訳」(machine translation)を区別する場合もあるが、本稿ではこの2つを一様に扱うこととしたい。
- 2) 第20回記念研究大会だと内元清貴「多言語音声翻訳技術の研究開発・社会実装の現状と将来」、第21回研究大会では菊池茂「Webサイトの多言語自動翻訳サービスと防災用途自動翻訳+音声合成システム」という報告がある。

## 文献

長尾真 (2016) 「巻頭言 言語の壁を乗り越え相互理解を深めるために」 砂岡和子・室井禎之編著『日本発多言語国際情報発信の現状と課題：ヒューマンリソースとグローバルコミュニケーションのゆくえ』朝日出版社、1-4

(上智大学総合グローバル学部特別研究員 PD)

